

## 第73回数理社会学会大会

第73回数理社会学会大会（JAMS73）は、2022年8月27日（土）・28日（日）の2日間開催された。当初は信州大学松本キャンパスでの開催を予定していたものの、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、オンラインへの開催に移行した。開催方式の変更にもかかわらず、参加者数は前回大会から大幅に増加し、会員（156名）と非会員（42名）あわせて200名近くの参加申し込みがあった。報告数も前回のJAMS72から増加し、自由報告（口頭）は26件、萌芽報告（ポスター）は45件の応募があった。

1日目は「移民・エスニシティ」「数理」「実験・歴史」「計量」の4部会と萌芽的セッションⅠが行われた。数理社会学会の特徴に、数理・計量という手法上の共通項を軸に、社会学の幅広い領域を扱う報告が集まる点がある。広い意味で人口分野に関係する報告もいくつか行われ、「持家取得におけるエスニック集団間の差異」（東京大学大学院 金希相）、「子どもの存在は伝統化した家事分担を定着させるのか」（大阪大学 尾藤央延）、「性交渉の幸福度への影響」（専修大学 石橋拳）などがその例である。また、午後には第14回数理社会学会論文賞の発表があった。受賞論文は吉田航「新卒採用のジェンダー不平等をもたらす企業の組織的要因」（社会学評論、2020年）であり、発表後に受賞講演が行われた。受賞論文は、組織の経営状況に着目し、環境の変化に応じて組織的要因がジェンダー不平等に与える効果の変化を明らかにした点が、高く評価された。

2日目は「ジェンダー」「方法」「階層・教育」に、会員発案特別企画として「地理空間情報を用いた社会学研究の展望」を加えた4部会と、萌芽的セッションⅡが行われた。「Education and Fertility Intentions in Japan: A Causal Effects' Assessment」（Tohoku University Roland Schimanski）や「大学の地理的配置の変化と進学機会の不平等」（学習院大学 麦山亮太・立教大学 豊永耕平）など、出生や人口移動に関連する報告もなされていた。また2日間を通して、社会調査や統計分析など方法論に貢献する報告も多く行われた。例えば、「回顧式家族調査の方法論的な要点と課題」（関西大学 保田時男）では、当研究所の実地調査を遂行する上でも有益な情報が多く提供されていた。

数理社会学会大会は年2回開催されており、次回JAMS74は、2023年3月に筑波大学での開催が予定されている。 （吉田 航・藤間公太 記）

## 第32回日本家族社会学会

第32回日本家族社会学会は、2022年9月3日（土）、4日（日）に日本女子大学目白キャンパスにおいて開催された。前回、前々回の大会は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けてオンライン開催であったため、対面での開催は3年ぶりであった。会場では、直接交流できる機会を得て久闊を叙する場面や、研究報告後に初見の研究者同士で会話が盛り上がる場面を随所で見かけた。

今回の大会では、質的データ、量的データの両面から「性的マイノリティと家族の現在」について考えるテーマセッションが2つ企画され、さらにシンポジウムが「性的マイノリティと家族研究」をテーマとして組織された。この分野での研究報告は合計11本に上り、学会期間を通じて活発な討議・研究交流が行われた。また、歴史人口学、女性の再就職、森岡家族社会学を扱ったテーマセッションも行われた。自由論題報告では、意思決定・ネットワーク、ケア・ケアラー、結婚・夫婦、子どもの教育、家族とは何か、ジェンダー・女性、性別役割分担、妊娠・出産、母親の就業・専業主婦の9つ